



気になるあいつ

わかぎるふ

双葉社

ラテン系な男

異性対して「好み」というものが誰にでもある。私は男と言えばラテン系にビビツとくる。なんでこんな話になったのかと言うと、先日までやってた芝居のキャストの中にラテン系に見える男優が2人いたからだ。最初は「暑苦しい顔やなあ、あんたら」なんて言っただけで良かったのだが、そのうち飲み会で誰かが「あんたら2人メキシコ人の観光客みたいやな。これからアミーゴって呼ぶわ」と言い出した。

で、その時みんな大うけして、私も彼らのことをアミーゴと呼ぶようになったのである。2人いるのでアミーゴ・ウノ、アミーゴ・ドスとも

呼んでいた。たんなる現場のノリだが、彼らのことをそう呼んで楽しんでると気分が明るくなるので助かった。

ラテン系の男。別に本物でなくても、日本人でもそう見える男が好きだ。髭が似合って陽気そうな感じの男達は、周りの雰囲気明るくしてくれる。人生に少々辛いことがあっても笑顔を絶やさないでいてくれる。そして女心もくすぐってくれるものだ。

今、ラテン系の男で世界一有名なのはアントニオ・バンデラスだろうか？ マドンナをふったという時点で彼の名声はうなぎ上りになっていた。私が一番好きなのは「フォー・ルームス」の父親役だ。なんだろうが格好いいのだが、バカで女好きで情熱的だった。エレベーターの中で女房にキスしながらドアを閉めるボタンを押すその姿は、世界一のおバカさんという感じだった。

ラテン系といえば、12歳のときから私の神様はアル・パチーノだ。卓

越した繊細な縁起。パッション、脚本に対する考察力：全て揃っているのに、背が低く、手足が短い不恰好な男。そんな彼が演技力一本でいい男に見えたり、情けなく見えたりする。変幻自在の魔法のような芝居の出来る男である。憧れずにはいられない。30年以上前に「ゴッドファーザー」で彼が見せてくれたもの、それが今日まで私の力になっている。

さて、サッカーのロベルト・バジジオはラテン系の中でも最高の男である。紳士で女たらしで、天才。嗚呼：格好よすぎるねん！ といつもいつも思わせてくれる人だ。あの有名なワールドカップの最後のPK戦、絶対にバジジオが外すはずのなかった最後のゴールが決められなかった時、彼は天を仰いで跪ひざまずいた。あの瞬間が忘れられない。人生最高の瞬間が負で終わってしまった時の男の顔。記録にはのこらなかつたのかもしれないが、永遠に記憶に残る男の顔だった。きっと、あの日バジジオは気まぐれな天使に邪魔されたのだらう。

ラテン系の男は何をしても絵にならないといけない。それが私の思い込みだ。しかし、ラテン系は最近人気がない。なんせ中国、韓国映画ブームなのでお醤油顔が流行中だから仕方ないのかもしれない…残念なことだ。アジア映画の中にだってラテン系はいっぱいいるのに、どうも人氣薄である。

そんな中、最近のラテン系の俳優の中で一番のお気に入りと言えば、ベニシオ・デル・トロである。今回の写真は映画雑誌から角度を決めて私が撮ったものだ。ちよつと目には彼だと分らないが、サングラム越しの目が女心を射抜くようではないか！ 最新作の「21グラム」も是非見て欲しい一本である。セクシーで不細工で、情けない男を演じたら今は右に出る者がいない人である。熱い氣持でお試しあれ！

【著者略歴】

わかぎあふ

1959年、大阪府生まれ。女優、エッセイスト。1986年より作家・中島らも氏とともに劇団「リリパット・アーミー」を主宰し、現在同劇団の進化形「リリパット・アーミーⅡ」の座長。1994年より演劇ユニット「ラックシステム」を旗揚げ。演劇制作会社「玉造小劇店」を運営し、女優のみならず、脚本、演出、メイクから衣装まで芝居全般にわたりその才能を発揮し続けるスーパーレディ。主な著書に『すみっこのすみっこ』『女体の神秘』『秘密の花園』『ぬくい女』『太りすぎの雲』『イブの抜け穴』など多数。
